

フシの本懐一名こそ惜しけれ

シレトコブシ
Aconitum misaoanum

花柄に屈毛と開出毛があることが特徴。シロバナシレトコトリカブトの写真は『しれとこライブラリー6 知床の植物1』p. 147を参照

何をか言はむ さりとて見たいものは我慢できぬわい
——狂言「附子」より

知床半島を和名に冠した植物にはシレトコスミレ、シレトコブシ、シレトコスグリ、シレトコケハマエンドウ、シレトコザサ、シレトコスゲ、シレトコイノデ、シレトコアザミが挙げられます。といっても、これらには現在使われていない名前や、道東の知床とは別の地域にある知床に由来するものも含まれており、一般に耳にする機会があるのはシレトコスミレくらいではないでしょうか。

シレトコブシという名前もまた聞き慣れない名前かもしれません。この植物については、これまであちこちでシレトコトリカブトの名前が採用されていたからです。トリカブトがなぜブシになるの？ と不思議に思われる方もあるでしょう。そもそもトリカブトの名はその花の形が雅楽の舞で使われる鳥兜というかぶりものに似ていることからついたものでした。

一方、トリカブトの仲間には強い毒をもち、加熱や加水分解で容易に弱毒化できることからアイヌ民族が矢毒に使ったことは有名です。毒はもちろん薬にもなり、漢方では根茎を強心、鎮痛薬などに利用します。華岡青洲が世界初の全身麻酔手術に使った麻酔薬もトリカブトとチョウセンアサガオが主成分でした。

漢方の生薬としては、根茎を部位や形状により烏頭(うず)、附子(ぶし)などに区別していました。古典の教材としてよく使われる狂言「附子(ぶす：ぶしと同じ)」では、作品中でなんと附子の風下にいるだけで命を失う猛毒として登場します。

これらの人口に膾炙(かいしゃ)した生薬名が植物名にも利用され、結果として同じトリカブトの仲間に

〇〇トリカブト、▲▲ブシ、□□ウズという3通りの和名がずっと作られてきたのでした。

そしてシレトコブシは1959年に田村道夫と難波恒雄によって知床岬産の標本をもとに新種発表された植物です。発表に使ったと後に考えられた選定タイプ標本は、昨年12月まで開催していた特別展「知床岬」で展示したのでご覧になった方もいるでしょう。

当時の論文には、和名はシレトコブシと明瞭に書かれています。これが一体どういう経緯でいつシレトコトリカブトになったのでしょうか。手持ちの文献では新種発表のわずか2年後、1961年に出版されて広く利用された保育社の『原色日本植物図鑑(草本2)』においてすでに使用例が確認できます。

学名には先取権があり、原則として先に有効に発表した名前が優先されると国際規約で決められています。和名にはそのような規約はありませんが、より古い和名を優先する傾向が強まっており、現在の図鑑類ではシレトコブシの名前が復活しています。

となると昨年の岬の調査でも再発見できず、相変わらず現状が不明のシロバナシレトコトリカブトは？

これは佐藤謙が知床岬で発見し、1986年に新品種発表した白花品(トリカブトでは極めて珍しい)ですが、シロバナシレトコブシに変更されることはないかもしれません。最初に発表されたときの和名がシロバナシレトコトリカブトだからです。(内田 暁友)

発行 知床博物館協力会 2016.2.23

099-4113 北海道斜里郡斜里町本町49

斜里町立知床博物館内

TEL: 0152-23-1256 FAX: 0152-23-1257

<http://shiretoko-ms.sakura.ne.jp/>